



神戸里山再生戦略

～里山を未来の世代につなぐために～

はじめに

神戸は市街地のすぐ近くに、広大な森林・田園地帯が広がるまちです。

森林の多くは、かつて薪や炭、肥料をつくるために利用されていた里山林で、田園地帯とともに「里山」の環境を形成し、市民の財産となっています。

しかし、現代の里山は多くの課題を抱えています。

ライフスタイルの変化やエネルギー利用の転換等により、使われずに放置された結果、大木化して暗く、荒れた森林が増えました。このままでは倒木や土砂崩れなどのリスクは高まり、里山の風景・文化だけでなく、CO₂吸収、生物多様性の保全、水源涵養など、里山が持つ多様な価値と機能を次世代に残せなくなります。

そこで、次世代を担う神戸市の若手職員を中心に検討し、「神戸里山再生戦略」を策定しました。

本戦略では、現代の里山に「新たな価値」を見出し、「新たな循環」を創出することで、持続可能な里山の姿を描いています。市民、企業、NPO、大学など多様な主体と協働し、健全な里山を次世代に受け継いでいきます。



神戸の里山エリア

本戦略において、里山とは、人が資源として利用することで維持管理されてきた、人の生活圏と近接した「里山林」（薪や炭、肥料をつくるための森林・竹林等）と、「田園」（農地・ため池・集落等）を指します。

神戸では、北区・西区を中心に里山エリアが広がっており、都市部（中央区など）から車で約30分でアクセスできます。

都市と里山が近い神戸の強みを最大限活かし、人の関わりを軸とした里山再生の取組みを展開します。



目 次

I 戦略の位置付け・目標年次 (p1)

II 里山の課題分析 (p2)

- (1) 昔の里山は資源循環型
- (2) 利用停止で放置された里山の増加
- (3) 適切な距離感・共存関係の再構築
- (4) 里山再生に向けたイメージ

III 目標とする「未来の里山」 (p6)

- (1) これからの時代を見据えた、都市と里山の循環をつくる
- (2) 「DIY」をコンセプトに、人の関わりを広げる
- (3) 里山の資源を使って森を若返らせる
- (4) 「循環」と「DIY」でつくる未来の里山

IV 戦略の方向性 (p10)

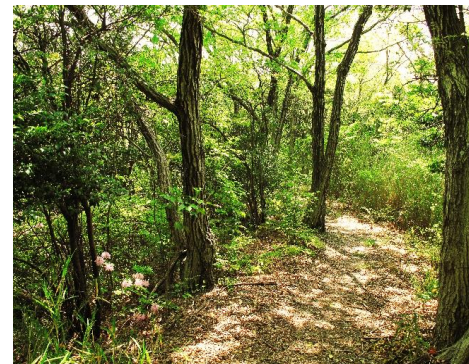
- (1) 4つの柱
- (2) 推進体制の構築

V アクションプラン (p12)

本戦略は、「神戸市基本構想」「神戸市基本計画」を上位計画とする里山関連の計画（「緑の基本計画」や「神戸農村・里山地域活性化ビジョン」など）に定められている施策を参照しながら、**里山に関する統一的な戦略**としてとりまとめたものです。

本戦略は、中長期的な目標として「山」の姿を未来の里見据えながら、**直近3年度（2025～2027年度）の戦略の方向性・アクションプラン**を定めます。

2023年策定の「KOBEL里山SDGs戦略」は、里山施策のうち、生物多様性に特化した戦略として位置付け、「KOBEL里山生物多様性戦略」に名称を改めます。



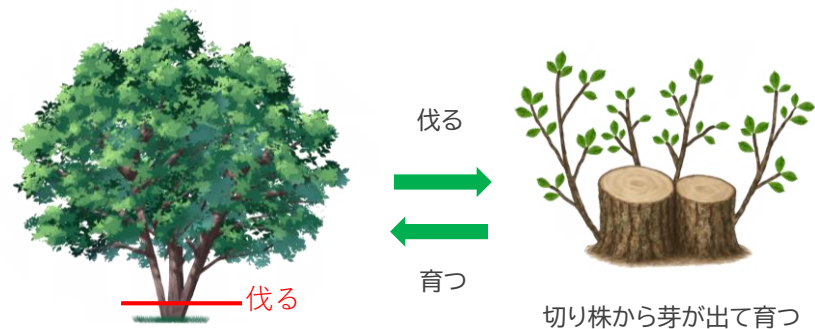
(1) 昔の里山は資源循環型

神戸には広大な森林が広がっており、**市の面積の約4割**が森林となっています。

神戸の場合、スギやヒノキなどを植林して育てる「人工林」は1割程度で、薪や炭、肥料をつくるために利用されてきた、ナラ類などの広葉樹からなる「**里山林**」が**大半**となっています。

ナラ類などの広葉樹を伐ると、切り株から芽が出て育ちます。昔の里山では、毎年一定の面積を順々に伐っては若い森を育て、大きく育ったら、また伐って使うという周期的な資源の使い方をしていました。「**木を伐って、使い、育てる**」ことで資源循環が成立していたのです。

<昔の資源循環型の里山のイメージ>



15～30年サイクルで森を育てる



炭にして暖房や
売って現金収入に



薪として燃料に



田畑の肥料に

1本余すところなく使う

(2) 利用停止で放置された里山の増加

ところが、1950年代以降、**里山に人の手が入らなくなります**。電気・ガス・灯油を使うライフスタイルへの変化や、化学肥料の普及などによって、里山資源を利用しなくなったことや、少子高齢化・都市への人口流出により、農業の後継者不足が生じたことが主な原因です。

樹木が適切な時期に伐採されなくなると、大木・老木が増え、ナラ枯れの被害を受けやすくなり、**倒木のリスク**が高まります。また、森の中まで光が届かず**暗い森**となり、種子からの芽生えや若い木が育たなくなります。

さらに、繁殖力の強い竹林が広がることで広葉樹林が駆逐され、**竹林の拡大**が進行します。また、管理されなくなった農地では、森林・竹林化が進み、雑草の繁茂、虫害や獣害の発生、景観の悪化といった問題が生じます。

こうした変化は、土砂崩れなどのリスクを高め、CO₂吸収や水源涵養、生物多様性保全といった**里山の公益機能の低下**につながります。



適切な時期に伐採されなくなると…



(3) 適切な距離感・共存関係の再構築

前述のとおり、昔の里山は、適度な人の利用と介入でバランスが保たれていましたが、里山の資源利用の減少等により、様々な問題が顕在化しています。

里山は本来、市民生活を支える多面的な公益機能を持っています。

公益機能を発揮できる健全な里山を次世代へと引き継ぐためには、**人と里山との適切な距離感・共存関係**を再構築することが不可欠です。



里山林の高齢化・大木化



放置竹林の拡大



耕作放棄地の増加



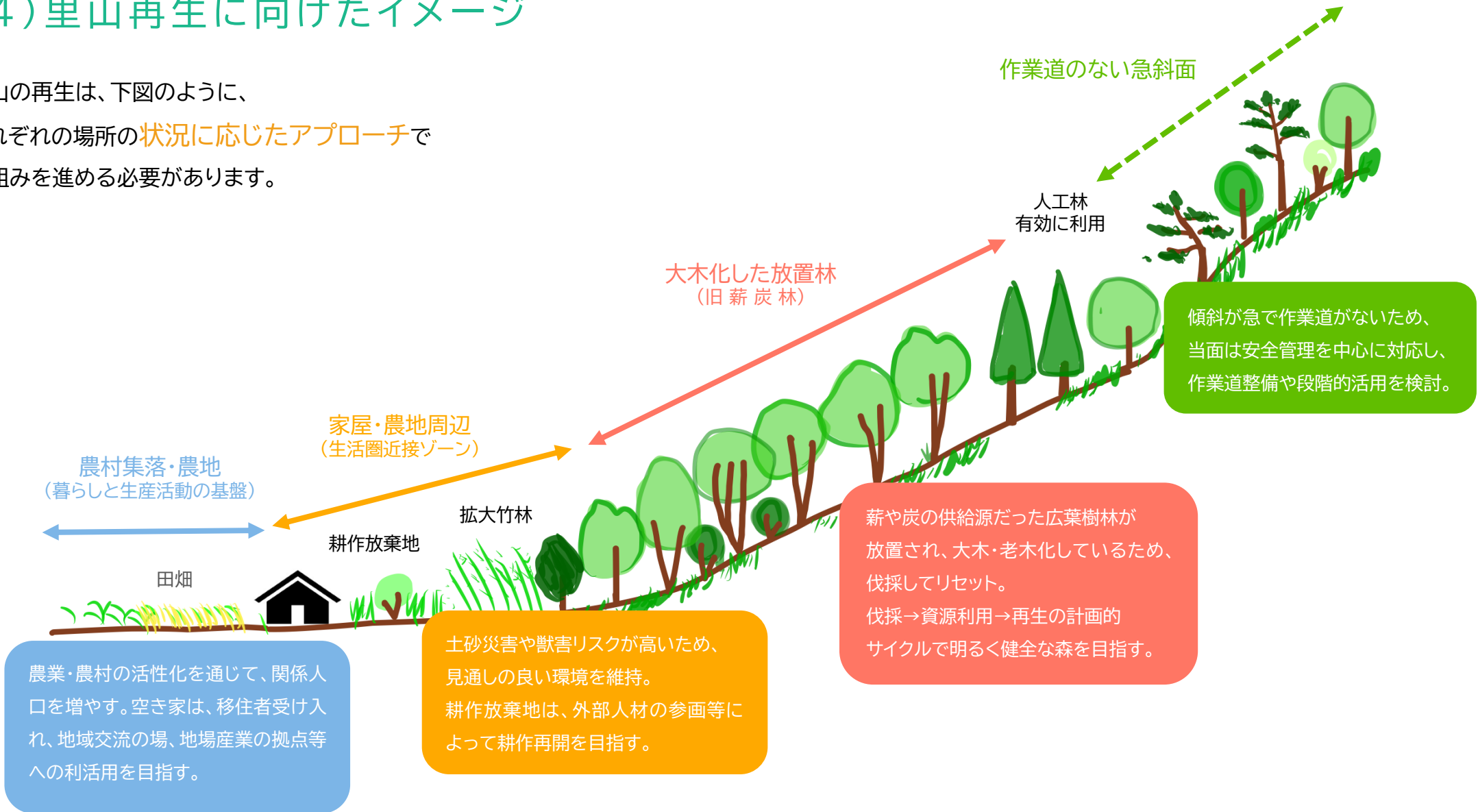
ため池の管理放棄



野生動物の出没・獣害

(4) 里山再生に向けたイメージ

里山の再生は、下図のように、
それぞれの場所の**状況に応じたアプローチ**で
取組みを進める必要があります。



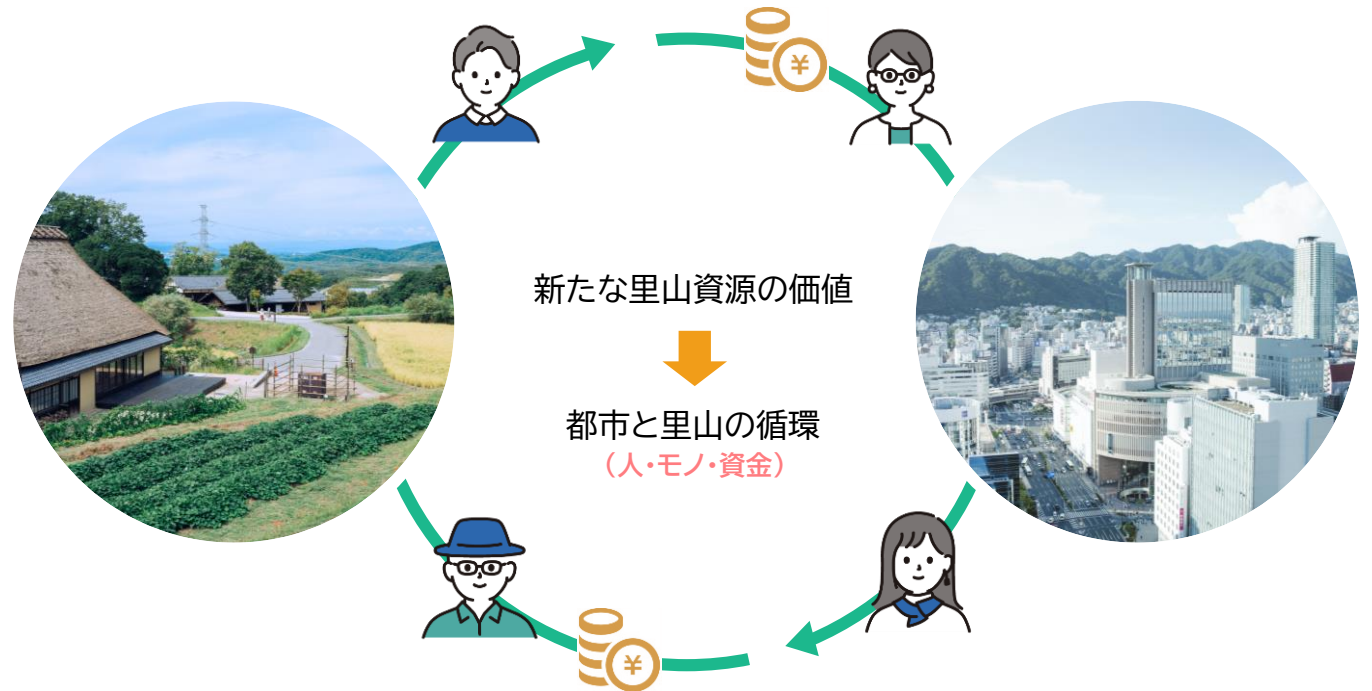
Ⅲ 目標とする「未来の里山」

(1) これからの時代を見据えた、都市と里山の循環をつくる

「適切な距離感・共存関係」を再構築するには、里山に**新たな価値**を見だし、
これからの時代を見据えた形で都市と里山の循環をつくる必要があります。

里山からは木材や食、癒し、学びといった価値が都市に届けられ、都市からは人・モノ・資金が里山に流れ込むことで、双方向の関係が形成されます。

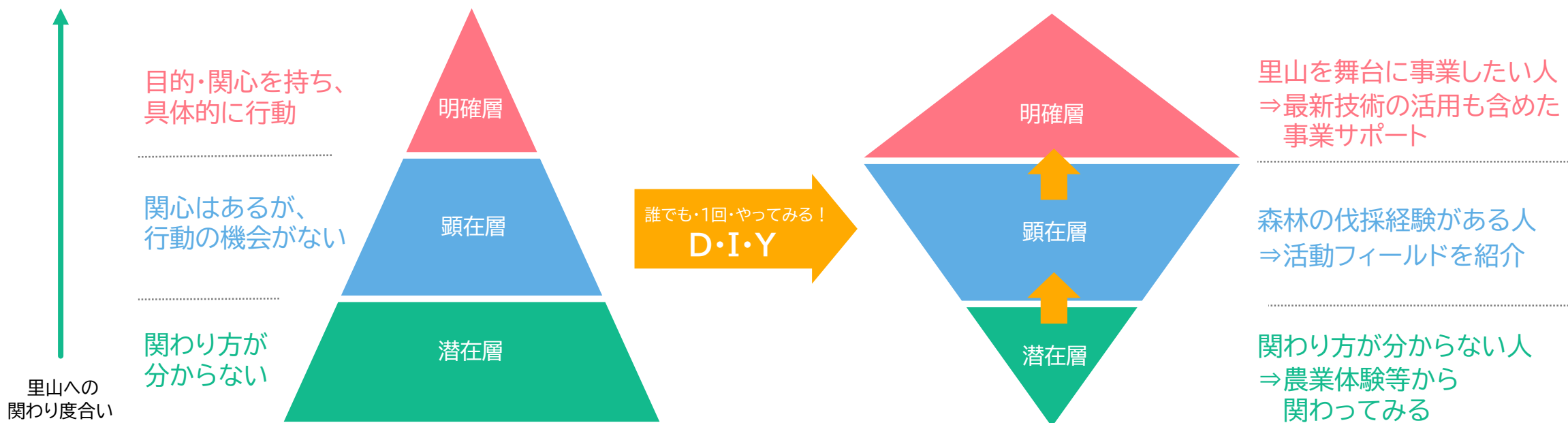
この循環を持続可能にするためには、多様な主体の参画や資金提供、コンテンツを企画・運営できる人材の育成が不可欠です。神戸市産材のブランド化や森林体験、週末農業など、里山の魅力を活かした事業が地域経済を支え、都市とのつながりを深めます。



(2)「DIY」をコンセプトに、人の関わりを広げる

また、都市と里山の循環を持続可能なものにするために、里山に対する人の関わりを広げることが必要です。人はそれぞれ、バックグラウンド(住む場所、体力、経験など)が異なりますが、**(D) 誰でも・(I) 一回・(Y) やってみる**をコンセプトに、バックグラウンドに応じて、無理なく人の関わりを広げていくための取組みを展開します。

専門的な作業は専門人材が担いつつ、小径木の伐採や竹林整備、農業体験など、比較的安全で取り組みやすい活動を通じて、関わりの裾野を広げます。活動フィールドの紹介や、都市と里山をつなぐプレーヤーの育成などにより、誰もが参画しやすい環境を整えます。



(3) 里山の資源を使って森を若返らせる

次世代に健全な森を引き継ぐためには、里山の樹木を適切に伐採し、資源として活用するとともに、次世代林を再生させる「循環的利用」が不可欠です。伐採と更新を繰り返すことで、森は若返り、生物多様性や防災機能も回復します。

木材などの資源を経済的価値に変え、森林管理に資金を還元する仕組みをつくり、伐採・製材・コーディネートなどを担う専門人材を育て、地域に根付かせることで、**持続的な里山の管理**が可能になります。



(4)「循環」と「DIY」でつくる未来の里山

都市と里山の循環、それを支える新たな関わり方(DIY)により、市民や企業、大学、NPOなど多様な主体が里山に関わるようになっていきます。

里山の樹木は「KOBE WOOD」などのブランドとして、地域経済の柱に。里山は観光や教育の場としても活用され、地域の誇りとなっています。適切な伐採、資源利用、次世代林の再生までを一つのサイクルとした持続的な管理が行われ、多様な生き物が息づく、明るく健康な森林が広がります。

かつての「自然の恵みを享受し、自然に寄り添う暮らし」が、現代の技術と価値観で再構築され、新しい風景が広がっています。



都市と里山の循環

例



農業体験



エコツーリズム

DIY 誰でも・1回・やってみる

例



竹林整備ボランティア



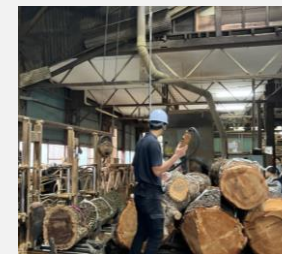
子どもの森遊び

里山資源の循環的利用

例



神戸市産広葉樹材の
製品化



森林業務従事者の
育成

未来の里山

(1) 4つの柱

前章で掲げた、中長期的な目標としての「未来の里山」を見据えながら、
直近3年度(2025～2027年度)で取り組む戦略の方向性を4つの柱にまとめました。

1

資源循環の仕組みづくり

里山資源に新たな価値を見出し、「なりわい」として成立させるため、
価値を評価する仕組みや、地産地消の循環モデル構築、里山の起業支援などに取り組めます。

2

里山に関わる人材の確保

里山に関わるために必要な知識・技能を身に付けられる場を設けることで、
様々な主体が、それぞれのバックグラウンドに応じて、里山に関わることを後押しします。

3

技術・機材の導入支援

持続可能な形で里山と関わるができるよう、
省力化や効率化に役立つデジタル技術や機材を導入する支援を行います。

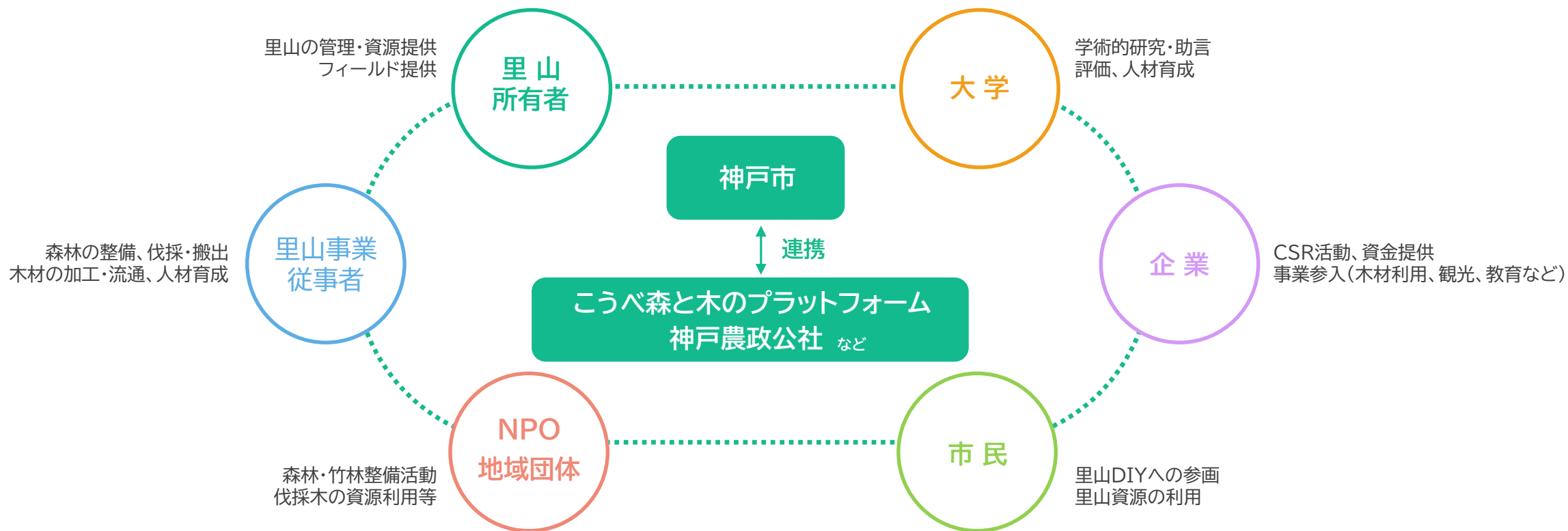
4

里山との関係性の創出

里山の問題を自分ごととして捉え、課題を知ってもらうとともに、
様々な主体と連携して協働するための支援を行うなど、里山との関係性を創出する取り組みを行います。

(2) 推進体制の構築

4つの柱で掲げる戦略を持続可能な形で進めるためには、市がコーディネーターとなり、「こうベ森と木のプラットフォーム」や「神戸農政公社」などと連携しながら、企業や大学、地域団体などの多様な主体が関わる協働の体制を築いていくことが重要です。それぞれの主体が持つ知見や資源を活かしながら、人材育成や資源利用促進のためのスキームの構築、様々な関係者の巻き込みなどを総合的に推進します。



「IV 戦略の方向性」に基づき、直近3年度(2025～2027年度)で重点的に実施する事業について、下記のとおり目的別に整理しました。
複数の目的を持ったプロジェクトについては、主要な目的に着目して分類しています。

1 資源循環の仕組みづくり

- 1-1 森林整備・木材活用の推進
- 1-2 KOBE備長炭
- 1-3 竹林管理・竹材活用の推進

2 里山に関わる人材の確保

- 2-1 森林管理の担い手育成
- 2-2 神戸ネクストファーマー制度
- 2-3 神戸農村
スタートアッププログラム
- 2-4 里山暮らしの推進

3 技術・機材の導入支援

- 3-1 里山管理の省力化の推進
- 3-2 野生鳥獣・外来生物対策

4 里山との関係性の創出

- 4-1 自然共生サイトを活用した
企業等との連携
- 4-2 里山・森林整備活動支援
- 4-3 里山に親しむ人材交流拠点

計画内容

里山の広葉樹林の整備から活用・再生までの再構築に向けた、モデル的整備と検証を行います。
また、資源循環の促進に向けて、神戸市産材のシンボルマーク・ロゴの普及や、公共施設等におけるモデル的な活用を進めます。

実施主体

神戸市、こうべ森と木のプラットフォーム、民間事業者、大学、森林所有者

めざす姿(2027年度)

モデル地区において、森林所有者(または管理を委託された者)による広葉樹林の管理を進めるとともに、神戸市独自の流通の仕組みや、品質に応じた最適な利活用(カスケード利用)が浸透し、広葉樹材が様々な形で取引されている状態を目指します。



神戸市産材製品(机)



KOBEWOOD ロゴマーク

計画内容

神戸市内で一定の資源量が見込まれるカシ類は付加価値の高い備長炭の原料になります。神戸市産のカシ類から備長炭を生産し、地産地消の仕組みを構築することは、原料調達を通じた持続的な森林整備だけではなく、海外の森林伐採・移送によるCO₂排出量の減少など、グローバルな環境問題の解決にも資する取組となります。

そこで、神戸市産のカシ類を活用した、備長炭製造の事業化に向けた実証プロジェクトや、森林資源循環に関する環境啓発事業を推進します。

実施主体

神戸市、民間事業者等

めざす姿(2027年度)

年間を通して備長炭を製造し、飲食店などに販売するとともに、カシ類の原木伐採時には、次世代林の再生までを1つのサイクルとした持続可能な森林管理を推進します。



KOBE備長炭



カシ類の原木伐採

計画内容

放置竹林による里山環境の悪化を防ぐため、竹林管理機材の貸出しや竹伐採アタッチメントなどの高効率な機材の活用により、地域団体と連携して竹林伐採を進めます。

伐採した竹の収集・加工・保管のための拠点を整備し、加工した竹チップを堆肥の副資材とするなど、資源循環型農業を推進します。

実施主体

神戸市、一般財団法人神戸農政公社

めざす姿(2027年度)

竹林所有者、地域住民との連携により、竹林の拡大を抑えます。また、伐採した竹を資源として活用し、経済循環の流れに乗せることで、持続可能な管理体制の構築を目指します。



放置された竹林



竹チップの活用

計画内容

里山の管理に、幅広い視野で取り組める人材を育成するための講座を開きます。

- ①里山の管理を担う事業者の技術研修
- ②資源活用コーディネーターの育成講座

実施主体

神戸市、こうべ森と木のプラットフォーム

めざす姿(2027年度)

広葉樹林の管理にあたっての基礎的な知見が整理され、管理方法について、森林所有者や事業者、管理に携わる市民の中で、理解が進んでいる状態を目指します。



里山広葉樹活用研修



事業者講習会

計画内容

働きながらも、一定期間(100時間程度)の研修を条件に、小規模な農地を借りることができる制度を推進し、多様な農業の担い手増加につなげます。

実施主体

神戸市、一般財団法人神戸農政公社

めざす姿(2027年度)

本格的に農業参入する新規就農者に加え、ネクストファーマーをはじめとする半農半X等の多様な担い手を確保することで、農村に関わる関係人口を増やし、活気のある農村を目指します。



ほ場での実践研修



果樹の研修

計画内容

里山の地域資源を活かした起業を市内で展開しようとする若者等を支援するスタートアッププログラムを市内大学等と連携して開設します。新たな視点で農村地域の隠れた資源を発見し、農業経営の多角化(加工や飲食)や新事業の創出につなげていきます。

実施主体

神戸市、一般財団法人神戸農政公社

めざす姿(2027年度)

これまでの卒業生が農村地域で活躍の場を広げ、ネットワークが形成されていくなか、今後も起業による関係人口や移住人口のさらなる増加により、農村地域全体の活性化を目指します。



プログラムのイメージ



起業イメージ(シェアオフィス)

計画内容

市全体で人口減少・高齢化が進行するなか、農村地域でも、20年間で人口が約8割に減少するなど、地域活力の低下が懸念されている一方で、農村地域への移住に関心を示す都市住民は増加しています。都市と農村が近い特性を活かし、一時的な訪問・交流から、神戸の農村地域への居住をすすめる事業に取り組みます。

実施主体

神戸市、一般財団法人神戸農政公社

めざす姿(2027年度)

移住者の住居探しに役立つ「空家バンク」の運営、その空家を掘り起こす「空家おこし協力隊」の委嘱、空家を改修する際の補助金、移住体験施設の提供のほか、移住希望者と農村地域の住民の橋渡しとなる「農村定住促進コーディネーター」の配置などの支援策により、移住人口のさらなる増加を目指します。



里山暮らし相談会



空き家活用

計画内容

ラジコン草刈機やドローン等のスマート農機の導入を支援するとともに、農政公社がラジコン草刈機や竹チップパーのレンタル事業を実施することで、里山管理の省力化を推進します。

実施主体

神戸市、一般財団法人神戸農政公社

めざす姿(2027年度)

市が行うスマート農機の導入支援や農政公社が行うラジコン草刈機・竹チップパーのレンタル事業、実演デモを通じてスマート技術の活用が普及し、里山や農地周りの管理が適切に行われることで、農村景観の保全を目指します。



ラジコン草刈り機



竹チップパー

計画内容

農業被害などをもたらすイノシシやアライグマ、ニホンジカなどの野生鳥獣や外来生物について、ICT機器等を活用した調査や捕獲、被害対策を進めるとともに、市民団体や市民等の様々な主体と連携して対策を推進します。また、将来の有害鳥獣捕獲活動の担い手確保のため、狩猟や有害鳥獣対策に対する理解を深めてもらう狩猟体験会や広報啓発事業を実施します。

実施主体

神戸市

めざす姿(2027年度)

市民団体等との連携による捕獲対策の推進をはかり、農作物被害の減少を目指します。
狩猟体験会等を通じて、狩猟や有害鳥獣対策への理解を進め、狩猟免許保有者数や有害鳥獣捕獲従事者の増加を目指します。



捕獲対策の推進



狩猟体験会の開催

計画内容

2023年に自然共生サイトに認定された小河山林と周辺棚田について、生物多様性を守り育てるための里地・里山共生モデルを生み出す社会実験の場として活用します。

ネイチャーポジティブや30by30への関心が高まるなか、当該サイトには、企業や地域団体等による研修や見学の依頼が増加しており、新たな活動の担い手確保や企業等による経済的支援等につなげていくため、里地・里山に関心を持つ企業とのマッチングを促進します。

実施主体

神戸市、民間事業者、ボランティア等、大学等の学術機関(調査・研究等)
学生(フィールドワーク、広報等)、土地所有者(フィールド提供)

めざす姿(2027年度)

小河山林と周辺棚田において市民、企業、大学等による研修・調査など様々な実証事業を行い、健全な生態系を維持するとともに、成功事例を他のエリアにも展開し、自然共生サイトの認定数の増加を目指します。



小河山林周辺の棚田(自然共生サイト)



里地里山で見られる生きものたち
(左:セトウチサンショウウオ、右:キキョウ)

計画内容

里山林(私有林)において、竹林や雑木林などの森林整備(伐採、間伐)に取り組む地域団体に、森林整備費用、資機材の購入費用等を補助する事で、里山林の整備を推進します。
市街地等においても、森林整備に取り組みたい地域団体を対象として、相談対応や伐採に関する指導、資金や資機材の支援、伐採後の木材活用を伴走型でサポートします。

実施主体

地域団体、民間事業者等

めざす姿(2027年度)

地域住民による適切な伐採や伐採木の資源としての有効活用を通じて、里山林の再生を進めます。



竹林整備活動



森林整備活動

計画内容

人材育成や多様なプレーヤーの参画促進を目的として、都市住民がアクセスしやすい北区の里山エリアに、里山に親しむ人材交流拠点を整備します。

また、市街地近郊にありながら、自然や農地が多く残されている多井畑西地区において、企業や学生団体、市民の参画のもと、自然環境を再生する取組みを進めます。

実施主体

神戸市、民間事業者、ボランティア等、大学等の学術機関(調査・研究等)

学生(フィールドワーク、広報等)

めざす姿(2027年度)

北区の人材交流拠点については、里山再生に興味をもつ多様なプレーヤーの参画のもと、子供たちをはじめ、次世代が里山に親しむことのできる拠点として整備し、活用します。

多井畑西地区では、多様なステークホルダーが参画できるプラットフォームを構築し、引き続き環境の再生に取り組みます。



人材交流拠点のイメージ



多井畑西地区